



DuMA ニュースレター

2017年1月30日

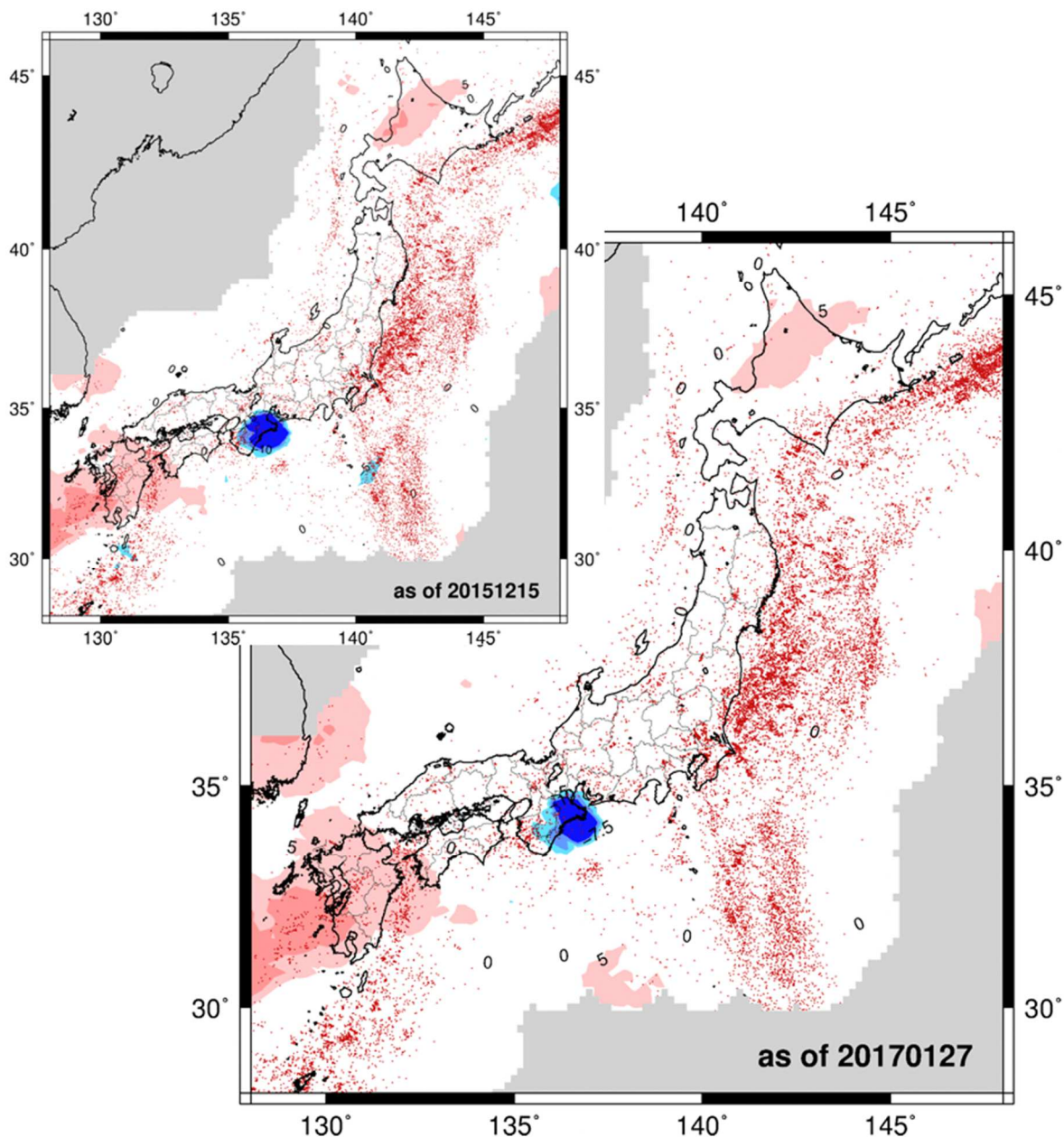
日本列島全域の(特に海域の大地震をターゲットとした)地下天気図®

昨年の12月15日の解析(左上)に続き、海域の大地震をターゲットとした1月27日時点の地下天気図です(右下)。対象となる地震は日本列島周辺でのマグニチュード7クラス以上の地震となります。

この解析では、2000年以降のおよそ16年間といった長期的な地震活動のデータを使用しています。図の中の赤い点は、この期間に発生した地震を表します。赤い点の多さからも日本列島で最も活発な地震活動というのは、東北地方の沖合である事がわかります。

地下天気図では、それぞれの地域の平均的な地震活動からの“ずれ”を計算しています。そのため地震活動度が異なる地域でも、同じ基準で評価する事が可能です。この解析で今後、大きな地震活動が発生する可能性が存在するのは、紀伊半島を中心とした青い領域(地震活動静穏化領域)です。長期間のデータを元にしていきますので、前回からの解析から一ヶ月半ほど経過していますが、そのパターンはまだほとんど変化していません。

また東北沖については、今回お示した地下天気図ではなく、311以降の地震活動のみを用いたパラメータでも解析を行っています(本年1月9日のニュースレターをご覧ください)。





DuMA/CEOの危機管理

昨年12月19日に引き続き、DuMA/CEO、岡本毅による危機管理についてのコラム（3回目）をお届けします。

危機管理入門（3）～悲観的に準備して、楽観的に行動せよ！

4 「危機管理」の実際～その1

刑事でもない一般の皆さんは、3で述べた様な“疑似体験(Virtual Reality)”で想定した様な機会に遭遇することは少ないかも知れない（それが故に、万が一、生じた時に備えての“疑似体験(Virtual Reality)”が必要なのだが。）

ここでは、一般の皆さんが遭遇する場面での、危機管理の実際を考えてみよう。

① 飛行機の座席

近距離でも中長距離でも、窓の外の風景を見たいと云う様な場合は別にして、多くの方は、トイレに行く場合等を考えて、「Aisle(通路側)」の席を確保することが多いのではないだろうか？しかしながら、危機管理の観点からすると、「Window(窓側)」が正解である。統計的に見て、飛行機がハイジャックされたとき、飛行機が墜落して全員が死亡する場合は別として、ハイジャック犯と小競り合いになったりして怪我を負う確率が高いのが、通路側に座っている乗客である。もし、その様な事態が起きたら、窓側の席で、低姿勢(Low Profile)でじっとしているのが正解である。

② 新幹線等の座席

1) 自由席の禁煙席、2) 進行方向後方(出来れば最後列)、3) 進行方向左通路側(東海道新幹線ならC席、東北新幹線等ならD席) が危機管理上は良い。1)の理由は、拳銃等を持っている恐れのある者が、自由席の禁煙席に座る確率は極めて低いからである。また、2)の理由は、最後列(或いは後方座席)であれば、車(コンパートメント内)で起きている、或いは、起きようとしている事象がいち早く把握できる可能性が高いからである。さらに3)の理由は、列車がすれ違時に、何らかの原因で窓が割れたり、車両が損壊したりした場合に、進行方向左側であれば、より安全である可能性が高いからである。実際、2000年3月8日に、東京メトロ日比谷線の中目黒駅付近で、進行方向右側に乗車していた高校生らが、脱線した対向列車との接触で亡くなった事故があった。また、進行方向左側でも通路側と云うのは、対向列車でなくとも何らかの原因で窓ガラス等が割れる等の事態を想定してのことである。

③ レストラン等での座席

パリで実際に起きたイスラム過激派による事件が、日本でも起きないとは限らない。その様な場合も含め、あくまでも“危機管理”の観点から安全な席はどの様な席であろうか？

それは、1) 壁を背に背負い、2) 非常口に近い 席である。1)の理由は、②の2)と同じくその場全体が見渡せるのと同様によるもので、さらに、背後から襲われる心配が無い(実際には少ない)からである。2)については、云うまでもないが、ただ注意すべきは、事件が起きたからと云って、一目散に非常口に駆け込むのはかえって危険で、暫くは、机等の下で、じっと伏せておくべきである。